育て！新キャンパス

――半年たった田辺校地

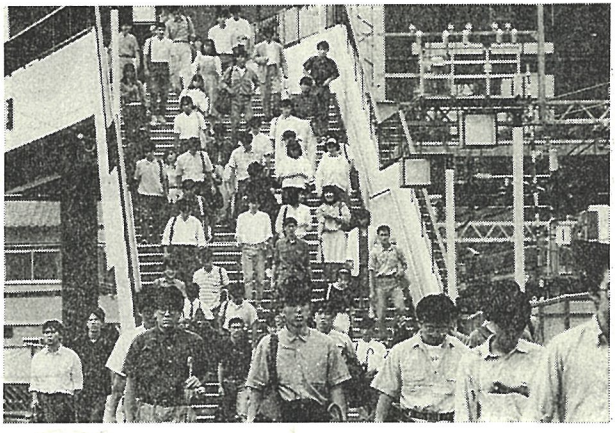
河野仁昭

歩く

田辺町の丘陵の上に、同志社の赤レンガ色の建物群が忽然と姿をあらわしてから、半年たった。一年たらずの工事だったから、文字どおり忽然、という感じであった。五年以上もまえに国際高校の校舎が建ったが、それは天神山の西側だったので、近鉄線のほうからは見えなかった。

九月に竣工するという跨線駅舎を工事中の興戸駅に降りると、目のまえに田園がひろがる。田舎育ちのせいか私にはなつかしい風景だが、学生の列はほとんど脇見もせずに、青田の中のアスファルト道路をつききって、陸橋の階段をのぼって行く。民家のはずれに「外国語の訳本あります」「コピーします」といった看板が出ていた。陸橋の下の田に、蓮が点々と赤い花を浮かべていた。

ふと、男女学生ともに歩きやすそうな靴をはいていることに気がついた。以前、学生たちの履物が気になったことはない。陸橋を超



跨線駅（一九八六年九月竣工）

え、だらだら坂をのぼる十五分の通学路は、いやでも「歩く」ということを意識させる、だから履物が気になるのだ。

歩くことを厭うからでもあり、習慣化しているからでもあろうが、四月五日にデイヴィス記念館でおこなわれた入学式のあとの数日間、それはオリエンテーション・ウイークであったが、かなり多数の学生が乗用車でやってきて、その車を構内の路上にとめた。無制限に駐車させては危険だから、職員は手分けして自動車通学を止めるよう説得し、無断駐車に対しては注意をくり返した。

努力の甲斐あって、いま構内の路上に駐車している車は、少なくとも教室棟や図書館周辺には見られない。そのかわりに、というべきか、キャンパスの周辺に有料駐車場がふえた。六月末現在、公認のそれは四カ所。まだふえそうである。顧客のほとんどが同志社の学生で、一日平均、四カ所で二〇〇台ぐらいだろうとみられている。

かつて私は、アメリカ・ノースカロライナ州の樹海の中にあるデューク大学を訪ねたことがあるが、この大学の最大の悩みの一つは駐車場の確保であった。過密の国日本からやってきた者には信じがたいような話だが、もはや駐車場をつくる余地はどこにもないと、副学長はいっていた。みだりに樹木は伐れないのだ。そういわれてみれば、路上も空地も車で埋めつくされている。その大学の隣のノースカロライナ州立大学はもっと深刻で、「私の大学は四年制だが、学生は五年かかって卒業します。実質四年間は勉強し、一年間に相当する時間は駐車場を探しているのです」と、一人の教授は渋い顔をしていった。

そうならざるをえないのは、交通機関があまりにも乏しいからである。広大な樹海にポツンと大学があるのだ。田辺は交通機関が乏しいなどといったら、田辺町の人たちに叱られるだろう。

丘陵の林の上からのぞいている女子大学の建物を、最初に電車の窓から見あげたとき、私はむかし読んだフランツ・カフカの『城』を思い出した。おぼろげながら、私は次のような一節を記憶していたらしい。

「城は、遠く離れたここから見る限りでは、Kの予期していたところにだいたい合っていた。古びた騎士の山城でもなく、新しい飾り立てた館（やかた）でもなく、横にのびた構えで、少数の三階の建物と、ごちゃごちゃ立てこんだ低いたくさんの建物とからできていた。」（原田義人訳）

大久保のほうから田辺町へ渡る木津川の橋から遠望すると、よりいっそうカフカの『城』

のイメージに近い気がする。ただし、カフカのそれよりはるかに美しい。『城』を読んだのは、私を追いこして行くこの学生たちの年ごろであった。そのころはもちろん、西洋の城など見たこともなかった。

学生たちは、陸橋の階段もだらだら坂もほとんど速度を変えない。二十歳前後の体力は、変える必要を感じさせないのだ。坂のかたわらのくさむらに、マツヨイグサというのであろうか黄色い花が咲いており、「ギィーッ、ギィーッ」と虫が鳴いている。

だらだら坂をのぼって校門へむかう

田辺校地にはいま、大学生が約八、五〇〇人、女子大学音楽学科の学生約二八〇人、この四月に開校した短期大学部の学生約四八〇人、国際高校生約八一〇人、合計一万人ほどの学生生徒が通学している。女子大学の学生たちはだらだら坂の途中から、くさむらの急な斜面につくられた細く急な石段のほうへ分れて行く。登ったところに通用門があるので、それがキャンパスへの近道だから、急な坂でも我慢するのだろう。二期工事（一九八七年末完成の予定）のために、坂の上は板囲いされていて、キャンパスの中の様子はわからない。その囲いがとりはらわれたら、田辺キャンパス全体の景観がさらに変るだろう。

学ぶ

だらだら坂をのぼった学生の列は、坂をのぼった速度のまま大学の正門のなかへ吸い寄せられるように入って行く。そしてそのスピードのまま、嗣業館（管理棟）のかたわらを斜につききって知真館（教室棟）へむかうのだ。ほとんど列からはみ出す者はいない。

門を入って広く明るい石畳の構内をすこし行くと、築山がきれて（先日の集中豪雨で、築山のあちこちが崩れていた。雨に弱い土質なのだ）右手にラーネッド記念図書館の全貌がみえてくる。その正面玄関へ通じる直線の広闊な道の両側は緑の芝生で、全体が見事なシンメトリーの構図になっている。見学者が嘆声を発するのは、この景観だ。

だが、もうすっかり見慣れてしまった学生たちは、ほとんど見向きもしない。図書館の左手が教室棟群、右手は香柏館（研究室棟）、宗教センター、実験・実習棟群で、こちらにはほとんど人影がない。切妻屋根が多いせいもあって、全体の印象はシンプルだ。

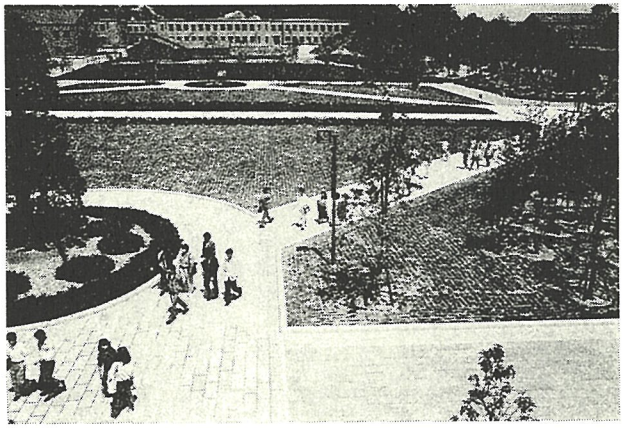
「出席率はいい」と、たいていの教員がいう。ただし「四分の一ぐらいが居眠りしているんじゃないかなア」と、苦笑まじりにつけ加える人もいた。今出川校地への通学とちがって、時間もかかるし、乗り替えや、通学路の歩行などで疲れている学生が少なくないようだ、というのである。朝の授業中に貧血か

なにかで倒れ、事務職員が厚生館保健センターへかつぎこんだような学生も何人かいたという。

私の想像だが、通学の疲れというよりも、睡眠不足と、朝食抜きで登校してくる学生たちがかなりいるからではないか。とくに男子の下宿生の場合、朝食をとってから一講時の授業に出るのは、ちょっと困難だろう。すでに今出川校地で、朝の体育実技の時間に倒れるのは、睡眠不足や朝食抜きの学生が多いと、ある体育の先生に教えられたことがある。だから、健康管理には自ら十分注意するよう、学生たちの注意を捉す必要が、とくに田辺キャンパスではありそうに思う。

教室は今出川に比べて快適だ、授業がしやすいと、これも幾人かの教員の共通の感想であった。騒音がないし、明るいのである。

大学の教室数は一三五室。体育実技一九一クラスを含めて約一五八〇クラスの授業が、このキャンパスでおこなわれている。小・中教室が主体だが、開講してみると大教室が足りなかったという。今出川ではクラス分けしていた科目を、田辺では分けなかったケースがあるのだろうか。



食う・憩う

「学生達にとって大学の本質が、教育、研究とともにコミュニケーションにあることを考えれば、大学のキャンパスは、教育、研究の場であるばかりでなく教師と学生の生活の場となることが大切です。このことは、都心を離れた郊外のキャンパスも、都会の中のキャンパスも同じですが、周辺に学生の生活する街が形成されていない郊外のキャンパスには、生活の場、ふれあいの場としての役割がより強く求められることになります。キャンパスづくりにおいては、豊かなキャンパスライフが展開されるにふさわしい空間をつくり出すことが最も必要なことです。」（山口祥悟「キャンパス計画について」『同志社時報』第七九号）

先年、ニューヨークからハイウェーをバスで約二時間、広大な森林が続く丘陵の上に、ぽつんと教会の尖塔をのぞかせているプリンストン大学を訪ねた。私はそこで、大学の鉄柵と道路をへだてて並ぶ静かな商店街が、大学人の息抜きと、家族ぐるみの交歓の場になっていることを知った。ほとんどが寮生活をしている学生たちも同様であった。土曜日と日曜日が休みになっているその大学では、金曜日の夜、その町が祭りのように賑わうのである。大学の中にはどんな施設でもある。だが、金曜日の夜、時間をかけて食事をし、交歓し、息抜きするような場だけはないのであ

る。

スエーデンのウプサラ大学の場合は、ともに中世以来の大学と町のあいだに柵もなければ門もなかった。大学の建物は古い王城のある小山のなだらかな斜面に点在し、小山の裾を流れる小川のあたりから、石造りの建物がだんだん密集してくる。だからそのあたりからが町なのだろうとは思うが、ほとんど装飾がないレストランへ入ると、どうも学生らしいボーイがあまり器用そうにない手つきで料理を運んでくれるし、客も大学教員とその家族らしく、私にはここが大学の構内かその外なのか見当がつかなかった。スエーデン語のメニューに当惑している私のために、ボーイは辞書を持ち出してきて英訳してくれたりした。

大学周辺の町が、大学にとってどういう意味をもち、どういう役割をはたしているか、三十余年も大学につとめながら、私はほとんど考えてみたことがなかった。かつての大学紛争のとき、投石などで西門周辺の商店に迷惑をかけるので、謝りに行ったことがある。どの店でも、私は逆に同情され励まされた。投石がありそうだと、白昼でも各店はシャッターを降ろし、平静にかえると店を開いた。

そんな町や商店街が、田辺キャンパスにはなくて、町から孤立しているのだ。いつまでもこのままだとは考えられないが、目下のところほとんどなにもない。だから建築家の山口祥悟氏は、キャンパスづくりに当って、そうした町をキャンパスにとりこんだのである。専門店をふくむ喫茶・食堂街、書籍や日用品のショッピング・センター、ラウンジ、憩いの、あるいは交歓のプラザとホール等々がそれである。それらは、人為的、計画的にキャンパス内につくりあげた町なのだ。

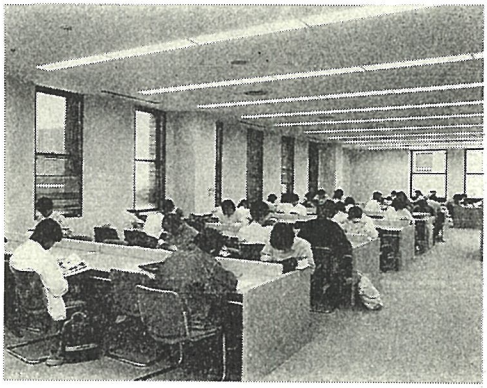
たむろする?

だが、キャンパスの中のいわばオアシスのようなそのゾーンにも、決して長くはとどまっておられない。食堂や喫茶店でねばっていられる時間には、おのずから限界があり、プラザはいまひとつ落ちつかない。ラウンジで比較的長時間しゃべりあっているのは、課外活動団体の学生のようである。学生たちは、どこでたむろしたり時間つぶしをするのか。

その一つの場所が図書館のようだ。前期の入館者数は、一日平均三、五六七名（今出川の大学図書館のそれの約二倍――座席数はほとんど同じ）であったという（深川晃而「田辺図書館点描」『同志社大学広報』第一九五号）。この数字は延人数であろうが、それにしても、登校者の二人に一人ぐらいの割合いで図書館へ入っているのは事実のようだ。

もう一つのたまり場は、たぶん教室棟であろうと、私は想像する。とくに雨の日などそうである。教室の机には落書きが目立つ。

ラウンジでくつろぐ



図書館閲覧室

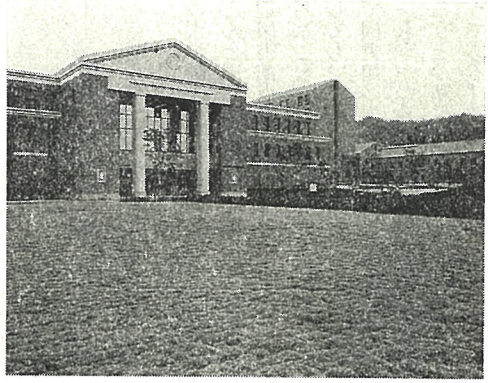
「どうしてまっさらの机に、落書きなど?」と、憮然たる表情で語る職員が何人かいた。落書きは授業中にもなされるだろうが、授業待ちの時間つぶしの際にやる学生もいるだろう。救いは、硬い芯の鉛筆で書いたもの以外は消えることで、「机の落書きを消しなさいと、授業を始めるまえに言うことにしている」という先生もいた。

長時間ねばっていられないはずの食堂や喫茶も、時間つぶしの場になっているらしく、座席の回転率が予想よりはるかにわるいと、厚生課の職員はいっている。

ある人は、図書館の前の芝生などに寝そべる学生がいると思ったのに、そんな学生は一人も見かけないと不思議がる。季節によってちがうだろうが、その場所はいわば舞台表なのだ。表はくつろぐ場ではないし、あの幾何学的な空間は憩う気持を誘発しないだろう。

私は決して田辺のキャンパス設計にケチをつけるのではない。称賛したい気持のほうがむしろつよい。だが、ひとがたむろしたりくつろいだりしやすい場所は、設計からはみ出したような、アソビや無駄、あるいは非合理的、非作為的な感じをうける場所ではないかと思う。そう思いたくなるほど、このキャンパスは合理的であり機能的なのだ。ベンチにしても、見た目に美しい配置と座り心地のよさは、かならずしも直結しないのである。

開校以来、同志社の学生生徒がよくたむろしたり散歩したのは、校庭よりはむしろ（グラウンドは別）御苑であり相国寺の境内であった。そこには適当に雑草や樹木が繁り、ベンチや、腰をおろせる自然石、そして手軽るな運動ができる広場があった。時代は変った



が、〝サテン〟やパチンコ屋だけが学生の時間つぶしの場ではなかろう。

樹木だけは年がたたなければ憩いたくなるような日陰をつくってくれない。だが、樹木は若く小さくても、たむろしたり憩いたくなるような空間をつくることは可能だろう。たとえばプラザにもっとも近いリザーブ地は、きれいに整地されて、いまは正課の体育に使われているが、あそこでなくてもいいしその一郭でもいいのだが、登り道をつけて、相国

寺境内や御苑に似たような、自然にちかい空間に変えれば、おそらくアソビの場にする学生たちがいるはずだ。プラザの西側の小山も、登り道と頂に少し手を加えれば、のびのびした気分を味わわせる場所になるだろう。キャンパスに自然を感じさせるものを残したり、自然をとりこむことは、あのように自然に恵まれた環境のなかでは無駄なこととのようだが、そういうものがないと、気持のゆとりやくつろぎを得がたいのも事実なのだ。

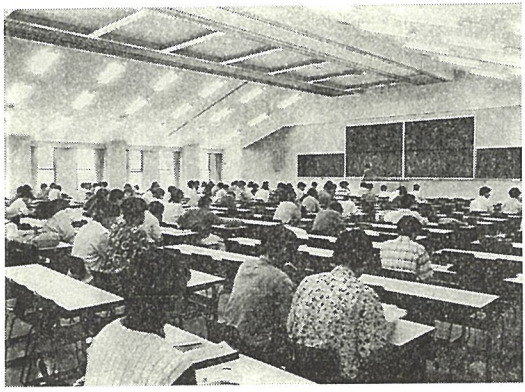
カリフォルニアのバークレー校の一郭にあるファカルティ・クラブの芝生の庭先に、自然のままの細い谷川が音をたてて流れていたのを、いまも私は鮮やかに憶えている。もしあの流れの存在を知らなかったら、私にとってバークレー校の印象は、もっとちがったものであったはずである。

これらのことは、私の好みであり趣味の問題に過ぎないかもしれない。にもかかわらずつい書かずにいられなくなるのは、「学生たちは授業が終ると同時に校門から出て行ってしまう」、「学生たちの流れを、線から面に広げさせる方法はないものか」、「学生たちはキャンパスに居着かない」といった意見や感想を、幾人かの人たちからきかされ、私もまた、学生たちのそうした流れを目撃しなければならなかったからである。

この問題は、実は教員たちの問題でもあるだろう。ある教員は、「研究室へ着いたとたんに、帰りのことが気になるんだ」と、本気とも冗談ともつかぬ口振りでいった。わかるなア、と私はひそかに思ったのである。かつて私は郊外電車で、しかも一時間以上もかけて通勤した経験がない。その通勤は郊外めいた地域から都心へむかうもので、その逆ではない。だから、田辺キャンパスへ月に二度か三度は行くけれども、遠くへきたという気がするし、やはり、帰りが気になるのだ。

今出川に研究室があって、田辺へ授業をしに行く教員たちもおそらくそうだろう。共同研究室は設けられているけれども、研究室としてはもちろん十分なものではない。授業のないときはコーヒーを飲みに行くか、図書館で本を読むことが多いと、二、三の教員はいった。そうだとすれば、授業が終ればさっさと引き揚げるほかあるまい。やむをえないことであろう。ただし、教室から興戸駅まで、学生としゃべりながら歩けるのは田辺の利点だ。

音楽学科の全学年と短期大学部をもつ女子大学や、ここに本拠がある国際高校と異なり、大学の田辺キャンパスは、学生数は全体の二分の一（常時通学者の数はおそらく今出川の二倍であろう）を抱えながら、ここに研究室をもつ教員は八十八名、職員七十余名と圧倒的に少数なのだ。



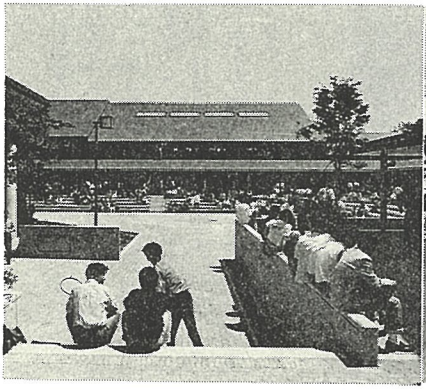
「学生が居着かない」理由の一つは、先生がたがおられない、そのさびしさが手伝ってのことのように、私には思われる。そしていま一つの大きな理由は、学生も教職員も街の生活が普通になっていることと、先にふれたキャンパスの設備である。

今出川では、開学当初の五棟のレンガ建築物の間に、戦後ほぼ三十年間にわたってビルディングを建ててきた。その結果、L字型のメイン・ストリートを挟んで、教室も研究室も事務室も分散してしまったから、ランチ・タイムや授業と授業の間の時間は、学生たちがまるで蜘蛛の子を散らしたようにキャンパスいっぱいに広がるのだ。とてもまっすぐには歩けない。

田辺キャンパスの場合は、施設の性格や機能にしたがって、いくつかのゾーンに分けて配置してあるから、学生たちは関係の深いゾーンに集中し、他のゾーンへは立ち入る必要がない。立ち入らなくても済むのである。確かに合理的・機能的ではある。だが、たまり場や時間つぶしの場がまだ十分でなく、彼らも居心地のよい場をいまだキャンパス内に見出せずにいることと相俟って、その動きは直線的になり、しかも、さっさと校門から流れだしてしまうのだ。

アメリカの都心に遠い名門大学の多くは、ほとんど全寮制だ。キャンパスの一郭に寮があって、全員にちかい学生たちがそこで生活しているし、教員の住居も近くにあるのだから、自ずから事情は異なる。同志社では、そんなことは望むべくもないし、それに都心から離れているとはいっても電車で三十分少々だから、原野や樹海のなかにポツンと建っているアメリカの大学とは比較にならぬ。

この五月二十一日に、田辺キャンパスに考古学資料室がオープンした。今すぐ実現する



のは無理であろうが、チャペル、ミュージアム、歴史（新島を含む）資料館などを加えて施設をより多様化し、休憩所やベンチなどももう少し分散すれば、そして、水飲み場を設け、もっと樹を植えたら、学生たちは徐々にキャンパス内に広がりもするし、居着くようにもなりそうに思う。すべてはこれからだ。

伝統

「伝統的に相続したすべてのものに対して、どうも私は敵意を持たねばいられませんし、私の獲得したものは、ごくわずかです。私はほとんど文化を持ちません。」（R・M・リルケの手紙。高安国世訳）

ヨーロッパの古い街や、美術館などをみていると、創造的・個性的な仕事をしようとする若い芸術家たちが、伝統的なものに対して、敵意なしは反抗心をおぼえたであろうことが理解できる気がする。それらは権威であり重圧であり束縛として意識せずにはいられないだろうからだ。そうしたものに挑んだリルケが、「私はほとんど文化を持ちません」とつけ加えているのが、私には極めて印象ぶかい。

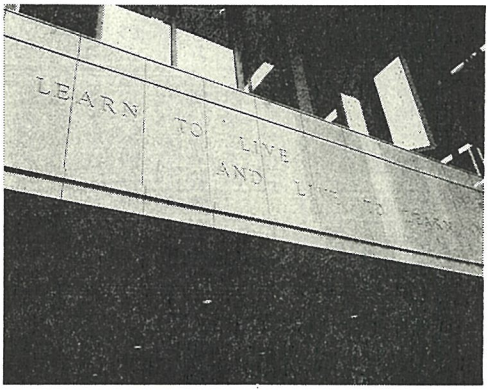
同志社は、創立されて一一〇年。この年月は長いともいえるが、「文化」といいうるような伝統をはぐくむには、まだ短かいともいえるだろう。にもかかわらず、一一〇年はやはり一一〇年である。今出川のキャンパスを歩いていると、しみじみそう思えてくる。キャンパスのたたずまいだけではない、教員にも職員にも、そして学生たちにも、「同志社」を感じるのである。

数カ月前、酒に酔った学生の悪るふざけで、新島襄の墓石が倒壊した。その墓はまだ再建されていない。私もその学生の行為に腹をたてた者の一人だが、壊れた墓石を起して、なんとか復元しようと苦心した跡をも目撃した者としては、たかが石じゃないかと思ってやったのでも、聖域の冒瀆を意図しての破壊でもなかったと認めざるをえなかったのも事実である。酒の飲み方もふざけ方も知らぬ若者だろうが、彼とその仲間たちは、「えらいことしてしもた」と思ったのだ。彼らも同志社の学生であったかと、密かに私は思った。

田辺キャンパスは、当然のことだが今出川キャンパスではない。けれども、田辺だからと極めつけられない問題もある。開校後まもない五月、田辺の学生課は、新入生の創立者墓参と今出川キャンパス見学の計画をたてた。だが、バスまでチャータしていたその計画は、実行にいたらなかった。参加希望者があまりに少なかったのだ。そのことは、しかし、昨年までの「創立者を偲ぶ集い」に、どれだけ新入生が集まっていたかを無視して論評さるべきことではない。まして、予定していた日は、土曜日の午後であった。

田辺チャペル・アワーや宗教部のプログラムに参加する学生も、決して多いとはいえないようだ。しかし、「昨年までの半数の学生を対象にしていると考えれば、その割にはいいんじゃないか」という人もいる。

だから、そのかぎりにおいては、田辺キャンパスだから特に問題があるとは言いがたい。けれども、真新しい田辺キャンパスは、一一〇年の歴史を経た今出川キャンパスではない。そこには学生たちをつつむ歴史的な雰囲気や、ふと目にする遺物もない。だから、余程意識的に伝え、教えなければ、キャンパスにいるだけで同志社的なものが自然に身につくことは期待しがたいのである。



もちろんそのことは、このキャンパスを実現させた人たちの関心事であった。国際高校の有隣館と啓真館の名は、今出川からの移植である。「何かシンボルになるようなものを、今出川から移したかった」と、故上野直蔵前総長は語られたことがある。

大学の建築物の館名は、創立以来永年にわたって同志社に貢献された方々の名や、聖書のことばから選ばれた。次のとおりである。

Learned Memorial Library

D. W. LEARNED を記念するもので、正面玄関の上には "Learn to Live and Live to Learn" と、彼の愛誦句が刻まれている。

Davis Memorial Auditorium

J. D. DAVIS を記念する体育館兼講堂。一階ロビーに "My Life is My Message" と彼の遺言が掲げられている。

知真館——「ヨハネ伝」第八章三一—三二節。

頌真館——「詩篇」第七一篇二二節。

香柏館——「詩篇」第八〇篇一〇節。

嗣業館——「詩篇」第七三篇二六節。

真誠館——新島襄の遺言の一節。

女子大学の建物もまた、聖書のことばから館名が選ばれた。

知徳館——「ペテロ後書」第一章五節。

頌啓館——「ルカによる福音書」第二章二八節、同三二節。

恵真館——「詩篇」第七三篇一節。

草苑館——「詩篇」第九五篇七節。

大学の正門には、新島の自筆を拡大した文字が刻まれており、築山には「良心碑」が建っている。また知真館一号館の壁面には、今出川の明徳館に掲げられているのと同じ「ヨハネ伝」第八章三二節から "VERITAS LIBERABIT VOS"（真理は汝らに自由を得させべし）とラテン語の聖句が掲げられている。

ほとんどすべての建物にレンガ色のタイルを張ったのも、今出川との一体感をかもし出すためであった。

「空間としては、田辺を新しい価値を生み出す空間として確保し準備させていただいたというふうに考えております」（鼎談「田辺開校にあたって」『同志社時報』第八十号）という木枝燦前大学長のことばには、同志社建学の精神をふまえながら、という前提があろう。

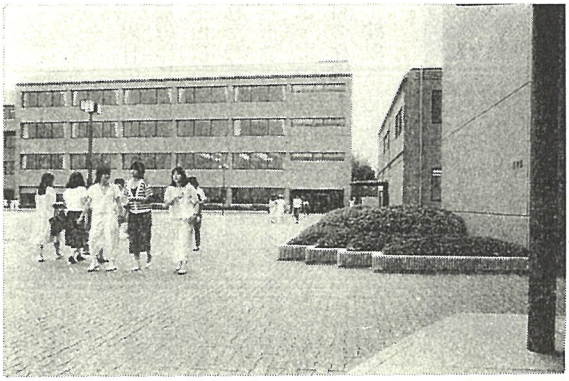
新しいキャンパスでの教育も研究も、同志社の伝統という太い根をもつものであり、その点にこそ田辺キャンパスを同志社のキャンパスとして位置づけうる大きな要因の一つがあるはずなのだ。

育て！　田辺キャンパス

田辺キャンパスにはじめての夏休みがきて、学生たちの姿がまれにしか見られなくなったとき、幾人かの職員がいった、「疲れました」と。キャンパス内の「町」は閉店にな

っていた。

開校準備から始めて半年、彼らは朝早く出勤して、夜、人気がなくなるまで懸命に働き抜いた。すべてが新しく、すべてがはじめての経験だったから、緊張の連続だったのである。田辺キャンパスに大きな破綻も失敗もなかった一つの理由は、おそらく、彼らが使命感をもってことを支えたことにある。



女子大学キャンパス

同じことは、このキャンパスに研究室を持つ教員についてもいえるだろう。

立場もわきまえず、憶面もなく、しかもごく僅かな見聞と体験しかないにかかわらず、私は書くべからざることまで書いた。それはいくつかの問題点をみたからというよりも、半年間、新キャンパスを支えた教職員に、過去半年間とおなじ使命感や熱情を今後なお期待してよいか、期待すべきであるかという一抹の不安や疑問を拭うことができなかったからである。おそらく危惧にすぎまいが、もしこの人たちが疲れはて、使命感や熱情を低下させたとき、田辺キャンパスはどうなるか。

一つだけ希望をのべて、私は拙いルポルタージュを終えよう。それは、教学面、事務面ともに、それを統合しうる責任者を田辺に配置することであり、責任ある人たちがもっと頻繁に田辺キャンパスへ通い、事情はいろいろあろうが、学内の重要な諸会議を可能な限り田辺においてももってはどうか、ということだ。それらのことは、現場の諸状況に即してよりよい研究・教育条件を総合的にととのえてゆく上で必要なことであり、また、田辺と今出川に血を通わせる上でも重要な意味をもつことになるであろう。このことは、田辺キャンパスに配置されている幾人かの教職員の希望でもあった。

田辺キャンパスで学んだ学生たちが、三年次になって今出川キャンパスへ移ってきたとき、どういう意見や感想をのべるか。早くそれをききたいと、私はおもう。

半年だけで即断することは慎しみたい。あと半年、いや一年半は待つべきであろう。あのキャンパスを実現させた同志社の英知と根気と決断からみれば、これを育てあげることをめぐって私が感じたことなど、ささやかな問題なのかもしれない。そうであることを願っている。

（本部社史資料室室長）